

三州足助屋敷訪問記。愛知県豊田市足助町。

二〇一三年七月二〇日・二一日。

岡 哲文

三州足助屋敷は紅葉の名所としても名高く、また文科省によって二〇一一年六月二十日に重要伝統的建造物群保存地区(重伝健)に指定された香嵐溪の古い町並みの近くにあり、一九八〇年(昭和五五)に開館した。生きた民俗資料館、技術の伝承を目指し、昔の生活の再現と、再建された茅葺き民家や土蔵等で職人たちによる物づくりの技を見ることが出来る。

名鉄名古屋線東岡崎駅北口四番乗り場から名鉄バス足助行きで約一時間乗って香嵐溪で下車する。バスはほぼ一時間に一本なので、良く調べてから乗るように。香嵐溪バス停前には神社と足助支所があり、道路隔てた側の狭い道を沿いに真っ直ぐ歩くと待月橋という赤い橋が見えてくる。ちょうど七月の猛暑日でもあったためか、川で遊ぶ子供たちや親子連れが沢山目に付いた。道なりにお土産屋やそば屋、旅館等が立ち並んでいる所を更に歩くと茅葺きの食事処、「栗の木茶屋」が見える。かき氷の看板、そして流しそうめんの実演を行っており、ここでも子供や親子連れが沢山いた。私は、流しそうめんの実演を見たのは、この時が初めてだった。目の前に漆喰壁と木造の楓門が見える。この門は柱や梁、小屋材などの部分には杉、桧、松、栗等の国産材が使われている。一階部分は売店でお土産を販売している。ここをくぐると目の前に大きな茅葺き屋根と漆喰壁の建物がある。「入口」と書かれ、壁に大八車の車輪が掲げられている。ここで料金を払って中に入る。



流しそうめんを楽しんでいる茅葺きの「栗の木茶屋」。大きな茅葺きの「入口」。隣には喫茶店の「堅香子(かたかご)」が併設されている。入口を入ってすぐに牛が飼われているのが目に入る。

ここでは茅葺きの「母屋」と「駕籠屋」を中心に歩いていく。因みにここ足助屋敷では多くの職人たちが実際に仕事をしているのを拝見することができる。時間帯が昼間だと、職人たちはお昼休憩に入って実演は見られないこともあるけど、たいがい写真撮影にも応じてもらえる。

母屋は昭和三十年代の豪農の母屋をモデルに再現された入母屋造りの建物で、二百年前に建てられたものを足助市綾部より移築した。内部に上がって囲炉裏や部屋などを見ることが出来る。私が訪問した時は、機織り職人が実際に仕事をしていた。入口に唐笠、蓑、編み笠などが展示してある。屋根も壁もふすまも綺麗である。



茅葺き屋根が綺麗な「母屋」内部の囲炉裏。工作中的の職人さん。

入口を入ると囲炉裏の部屋があり、昔の竈が置いてある。奥の空間はスタッフの食事処となっており、ちょうどお昼だったために食事している人たちがいた。隣は寝室になっており薄暗く、箆笥や行燈、鏡台などが置かれている。その部屋を出ると隣は仏間で仏壇のほかに朱塗りや漆塗りのお櫃、おちよこなどがガラスケースの中に展示されている。その部屋を出ると、前述したように機織り機が置いてあり、職人さんが織物をしていた。そのそばに藁の手織物の販売所があり、実際に作ったものが売られていた。平日だったが、高齢者から親子連れまで、結構見学者はいるようで、この家の中も見学者が何人かいた。

母屋を出ると土蔵が目に入る。一階は傘屋と桶屋の仕事場になっていた。ちょうど食事時のため、桶屋の職人さんはいなくて、木の板や仕事道具が所狭しと置かれていた。傘屋は仕事の最中だった。二階は昭和の生活を再現する展示が行われており、旧型テレビや黒電話、箆笥とラジオや中折れ帽子などが展示された一角があった。私はテレビ番組や資料でしかこれらを見たことが無かったが、

(黒電話は辛うじて知っている世代)、母たちの世代には懐かしい空間である。



桶屋の仕事スペースには材料と仕事道具がびっしり。仕事中の傘屋の職人さん。昭和の生活の雰囲気が漂う部屋の再現。

しばらく歩くと黄土色の土蔵に瓦の付いた庇の建物が見えてくる。「工人館」という土蔵造りの建物である。真ん中では私が訪問した時は、竹職人が仕事をしており、竹とんぼ作りが体験できるようになっていた。左右の部屋は販売、体験学習スペースなどに使われていた。

木造白壁の萬々館を過ぎると、食事処「薫風亭」がある。実は入口付近にも「檜茶屋」という食事処があり、檜茶屋の方は五平餅やアユの塩焼き、蕎麦などが食べられる。一方薫風亭の方は手作り豆腐メニューが中心で、どちらで食事をしようか少し迷ってしまった。旅行中はお昼を沢山たべておきたいから、帰りに檜茶屋で食べることにしようと考えて、園内を引き返すことにした。



工人館の外観と入口付近で仕事をする竹職人。檜茶屋のお昼。五平餅とアユの塩焼きが特徴。

施設内の中心に牧場があり、工人館を背に左側に茅葺きの建物が目に入る。そこに行くまでにくつかの仕事場があり、紙漉き、鍛冶屋など、実際に職人さんの仕事ぶりを拝見することもできる。鍛冶屋は江戸末期から二〇〇年以上続いている。部屋中一面に色々な刃物がならべてあり、一目瞭然に鍛冶屋だと分かる。茅葺きの籠屋は、職人さんが休憩中のため不在で、内部を眺めていたらいきなりサビ模様の猫が現れ、私を見たときに逃げるように外に出てしまった。この猫はこの施設内のスタッフには慣れており、飼われている状態だが、訪問者は警戒すると、スタッフの方から伺った。

実はここにはチビ太郎長という犬がおり、香嵐溪内で捨て犬であった所を平成十一年四月に足助屋敷に採用され、現在は営業部長をしているとパンフレットにもあったので、期待していたが、実はもうかなりの高齢で、最近姿を見せないことが多い。パンフレットの写真と概要だけを読んでおいた。

園内を全部見終わり、門の中にある炭焼きコーヒの店堅香子で、アイスコーヒーとスイーツを食べて、猛暑をしのぐ。更に門を出た所にある檜茶屋でお昼を食べる。アユの塩焼きと五平餅の付いた定食にした。

足助屋敷へ向かう途中で沢山の店で五平餅が食べられるようになっていた。これだけ沢山の店で五平餅を提供しているのを見たのはここだけだった。歩いている途中で見た案内によると、五平餅の発祥の地がこの足助だと書いてあった。初耳のことなので、帰宅して調べてみたら、信州など諸説あつてはつきりせず、足助が発祥であると、ここで断言がすることは控える。私の良く行く岐阜県の白川郷、富山県の五箇山でも五平餅を食べることが出来る。また福島県の大内宿では似たような食べ物で「しんごろう」というやはり白米を丸い板状にして甘い味噌を塗ったものが販売されていた。



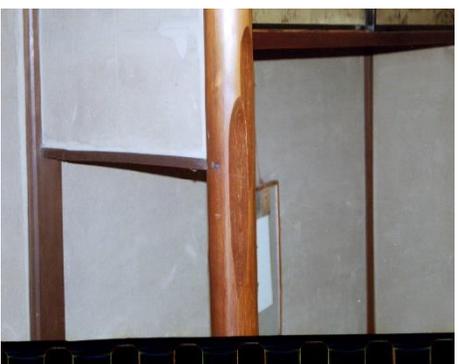
茅葺き家屋の籠屋とその内部。近くで回転している水車小屋。

初日は曇っており、施設内を巡っているうちに激しい雨に降られてしまった。

野外の施設で雨というのは結構大変だった。打って変わって翌日は晴天だった。また再び東岡崎から足助までバスに乗り、今度は足助の古い町並みを訪問した。

足助は伊那街道あるいは飯田街道とも呼ばれた街道の宿場町として栄え、その面影が今でも残っており、主に足助川を渡った場所に古い建物が集中している。私が橋を渡って古い町並みに入ったら、着物を着た若い女性と、一眼レフカメラを首から下げた男性たちの一団に出くわした。彼らはこの街並みをバックに撮影会をしていると言っていた。

郵便局、信用金庫、JAといった建物がみな白壁に瓦屋根の二階建てなのが特徴であり、良く見ないと他の建物と勘違いしそうだ。この街並みの中で一番特徴があるのが和菓子屋「加東家」である。江戸時代に白木屋宗七という人の造り酒屋で、天保七年（一八三六）九月二〇日に賀茂郡南部の有志二〇人によって引き起こされた加茂一揆の時に付けられた刀傷の跡があり、頼めば拝見することも可能である。歴史の一部を体験することができる町並みである。



足助の街並みと時代を感じさせる建物。和菓子屋加東家の刀傷跡。

今回は足助屋敷訪問がメインで、町並み訪問はあくまでそのついでだったために、詳しい言及はこれ以上ここではしない。足助屋敷を訪問したら、是非立ち寄って、古い町並みを散策してみるのをお勧めします。旅館もあるので、古い町並み内で一晚を過ごしてみるのも旅の楽しみかもしれません。

移築された合掌造り民家。

名古屋市東山動植物園内（旧太田家）。

名古屋市内の東山動植物園内に合掌造り民家が移築されていることを知っていたので、今回名古屋を旅行した時には是非立ち寄りたいと思った。

東山動植物園は広さ約六十ヘクタールの園内に動物園、植物園だけでなく遊園地や東山タワーといったスポットも存在しており、約七千種の植物を展示している。植物以外にも件の合掌造り、武家屋敷門、茶室也有園（宗節庵）といった茶室なども有している。

名古屋市内から地下鉄東山線に乗って星ヶ丘駅で下車する。植物園に行くには隣の東山駅より、こちらの方が近い。大学のキャンパスが近いらしく、駅周辺から植物園までは若者向けの店やレストランが多く、若者ばかりが目につく。案内があちこちに出ているから、それに沿って歩けば間違いなく植物園に行くことができる。星ヶ丘門で入館料を払って園内に入り合掌造り民家を目指す。

旧太田家は、天保十二年（一八四二）の建築で、岐阜県白川村の太田静氏のかつての住居であったものを、関西電力鳩ヶ谷ダムの水没より建物保存するため、昭和三十一年（一九五六）に当地に移築された。白川郷・五箇山の合掌集落の多くで分家が出来ず、家族や使用人も含めた大家族制だったが、この家も同様に使用人も含めて四十人が暮らしていたこともあった。昭和四十一年、同六〇年、平成一九年に屋根の全面葺き替えを行っている。特に平成十九年二月から六月までの葺き替えでは市民参加で行われ、その時の市民ボランティアたちが「名古屋の結」という団体を作り、合掌造りの管理やイベントを開催している。

母屋以外に離れらしい建物がある。母屋も含めて壁部分の木目は茶色く煤けた部分が剥がれて、経年を感じるが屋根の茅は七年経っていても、年数を感じない。パンフレットによると、四月から十一月まで、囲炉裏焚きや草履作り、糸紡ぎなどといったイベントが開催されている。勿論内部に上がって見ることもできる。平側から中に入ると、囲炉裏のある「すえ」という板の間があり、生活用具が一行に並んでいる中に合掌造りの模型が置いてある。それぞれに名前の書かれた札が付けられている。

この建物内で最も注目するものは、「えんのま」（廊下）の上の方に掲げている駕籠の実物と、玄関を入ってすぐに展示してある巨大な蜂の巣である。この蜂の巣は、この家を移築した時に二階部分にあったもので、ガラスケースに入っている。また二階の屋根裏も見られるようになっていて、五箇山や白川郷の公開されている民家のように、かつて使用した生活用具や民具が展示してある。

ことはなく、ごくわずかの糸車や機織り機が置いてあるのみである。



東山植物園内の太田家外観。廊下に掲げられている駕籠とガラスケース入り蜂の巣。

各種データ。
「三州足助屋敷」

住所 〒444-2224 愛知県豊田市足助町飯森三六番地

電話番号 〇五六五・六二・二一八八 FAX 〇五六五・六二・一七八二

ホームページ <http://www.asuke.aitaine.jp/~yashiki/>

営業時間 午前九時から午後一七時まで（入場は午後十六時三〇分まで）
休館日 毎週木曜日（木曜日が祝日の場合は翌金曜日）年末年始（十二月二四日から一月二日まで）。六月の第三木曜日と十二月十六日。
※ゴールデンウィークは無休。また休館日が予定なく変更になる場合があります。

入館料 大人三百円 子供（小・中・高校）一〇〇円。団体（二〇名以上は一割引。障がい者は半額。）

アクセス（電車・バス）名鉄名古屋本線東岡崎駅北口から名鉄バス足助行きで約七〇分。（バスはほぼ一時間に一本なので、要確認。）

名鉄三河線猿投駅(さなげ)からさなげ足助バス百年草行き約三六分。(こちら本数が少ないので要確認。)

(車利用)猿投グリーンロードから力石インターチェンジを経由して国道一五三号線で香嵐溪まで。

または東海環状自動車道から豊田勘八インターチェンジを経由して国道一五三号線で香嵐溪までと、豊田松平インターチェンジから国道一五三号線に出る道もある。

足助の街並みについては足助観光協会

住所 〒四四四・二四二四 愛知県豊田市足助三四・一

電話 ○五六五・六二・二二七二 FAX ○五六五・六二・〇四二四

ホームページ <http://asuke.info/>

「東山植物園」

住所 〒四六四・〇八〇四 愛知県名古屋市長種区東山元町三七〇

電話番号 ○五二七八・二二二二 FAX ○五二七八・二二二四〇

(公財東山公園協会 電話○五二七八・一七五一 FAX○五二七八・一六一〇八)

入園時間 午前九時から午後一六時三〇分。(閉園午後十六時五〇分)。

休館日 毎週月曜日。(但し月曜日が休日の場合はその直後の休日でない日が休園日。)十二月二十九日から一月一日まで。

観覧料 大人一人五〇〇円(一〇〇円)三十人以上の団体四五〇円(九〇円)一〇〇人以上の団体四〇〇円(八〇円)定期観覧券(一年)二〇〇〇円(六〇〇円)スカイタワー共通券六四〇円(二六〇円)カッコ内は名古屋市在住の六五歳以上の方の料金。中学生以下、障がい者は本人及び介護者一名まで無料。

アクセス 地下鉄東山線「東山公園」駅下車徒歩三分。「星ヶ丘」駅徒歩七分(植物園には星ヶ丘門が便利。)

東名高速道路名古屋インターより西へ車で約一五分。名二環(東名阪)上社インターより西へ車で約一〇分。名古屋高速四谷出口より東へ車で約一〇分。